第 72 回 GAORA 番組審議会記録（2021 年 3 月開催）

第 72 回番組審議会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、書面による開催としました。
今回は「スサノオノミカタ」について審議を行い、委員の皆様から次のようなご意見をいただきました。

番組審議

＜番組概要＞

B.LEAGUE に所属しているプロバスケットボールチーム島根スサノオマジック。
2010 年に創設してから、いまだ B1 リーグ西地区で最下位しか経験していません。番組では、2 つの地区上位 4 チームが出場できるチャンピオンシップリーグ出場を目指すスサノオマジックのシーズン前半戦のターニングポイントとなった試合を振り返りながらチームの戦力を分析しました。
シーズン途中で指揮官であるヘッドコーチが突然の辞任、攻撃の要ビュフォード選手がケガでの離脱、チーム崩壊の危機に直面した弱小チームが、もがき苦しみながらもプロの意地を見せて戦う姿を 3 ヵ月間密着しました。試合の中継映像を除いて、そのほとんどを iPhone 撮影で挑みました。

＜委員長総括＞

■本番組の特質すべき優れた点は、「普段フォーカスが当たりにくいチームが必死に戦う裏舞台をカメラで追う」という弱小プロスポーツチームのドキュメンタリーを通じて、コロナ禍で苦労し、悩み、落ち込む人々が自らの事として共感できること。そして、一般に日本の組織全般を想わせる組織風土、あるいは日本人によくみられる意識に基づく行動を想起して視聴者がなるほどと頷く、今日の社会に通じる「普遍性」をもつ番組に仕上がっていること。これは大変重要な点であり、これこそが「スポーツのもつ社会的公共性」である。
本番組は、スポーツのドキュメンタリーを、単なるスポーツのドキュメンタリーに留まらせない深みを持った内容で、今日の社会に対する適宜性を有するものであった。
スポーツをメインコンテンツとするスポーツ専門チャンネルであればこそ、今後もこうした、普遍性をもって社会に訴える力を持つ番組の制作を強く求めたい。

＜審議意見＞委員の主な意見は次の通り。

■本番組は、視聴者にスポーツを通して「元気になる」を超えて、「元気が沸いてくる」番組であった。「有名スポーツや著名人ではなく、ほとんど知られていない弱小チームを取り上げた事」も素晴らしい選択であった。
日本人選手が自信を取り戻し、精神的にも自立していく様子は iPhone を使ったことによって臨場感あふれるドキュメント映像となり、より緊迫した雰囲気を伝えることが出来たと思う。外国人選手がどんな役割を担っているのか、リプレイ映像を使って分かりやすく解説するなどバスケットボールの「見方」もしっかり伝えていた。後半に弱いチームの弱点や成長の証となる日本人選手の得点率が上がったことをデータや数字で示して「なるほど」と思わせた。また、チーム立て直しのための選手同士の胸襟を開いての話し合いや、自分事として考え行動する自主性の大切さは、視聴者自身がこれまで学校や社会で経験している事でもあり「その通りだ」と同調することができた。

■本番組は、わかりやすく、興味深く、惹きつけられる内容でとてもよかった。
河合代行コーチのコメントは的確で、流れがあって理解がしやすかった。適宜、図・グラフや数値を示しての解説があったのでとても分かりやすかった。どの組織や団体においても、この番組のような悩みや課題を抱えている。視聴者の多くは、似たような経験をもっていて共感できる内容であり、それだけの説得力があったように感じた。シンプルだが、改めて大切なものを再確認した気持ちになり、元気をもらった。
また、皆が頑張ろうと思っていてもなかなか結果が出ないことはあり、河合コーチのような立場の人が、俯瞰的に物事を見極め、的確な声掛けをしていくこと。これは、皆のやる気をさらに引き出し、チームをまとめあげていく上でとても重要なことだと学べた。

■認知度がまだ低いＢリーグで、地方都市の島根のチームを取り上げたことは大変良いことで、他チームにも刺激になったのではないか。更に調子のよいチームでなく、苦しくもがいているチームのドキュメンタリーであったことで、その様子がよく伝わる構成であった。
河合ヘッドの苦悩やチームキャプテンのリーダーシップを通して人間ドラマを見ることができた。試合については、勝ち負けでなく、各選手の特徴や攻撃スタイルに絞った構成により、試合を見るのとは違う視点で視聴することができた。
今後もマイナースポーツ及びその選手にスポットを当てた番組を作っていただきたい。

■成功者の葛藤をみるよりも、今、多くの人が感じているドン底感を共有している感覚で、コロナ禍で頑張っている多くの視聴者にとっても共感しやすい展開であった。
ロッカー内でのミーティングの様子などチームの本音がでる貴重な映像も多く、このような生々しいやり取りがあったからこそ、キャプテンの最後のプレーに通じる責任感を肌で感じ、番組に感情移入できたのではないか。ここまで内部にカメラが入れた取材を可能にしたスタッフとチーム関係者の信頼度の高さを感じることができた。
視聴者にもこのような時だからこそ face to face で話す大切さを感じ取ってもらえたのではないか。今の世の中の空気感に合ったとても考えさせられる素晴らしい番組であった。

■Ｂリーグを見ないものにとって、何をどのように扱うのか興味深く見ることができた。
一つには、経済的にもかなり苦しいローカルチームの現状が垣間見えたこと。公共の体育館を利用しての試合、例えばそのロッカールームの貧弱さなどにもかかわらず、集客ベースの弱いと思われる島根でも熱心なファンがいることに驚いた。
連敗の中コーチの更迭と突如チームを任されたコーチ代行の試行錯誤や苦悩が描かれ、さらに連敗中の試合で、ラストで劇的な勝利があるなどスポーツドキュメンタリーの定番ではあるが、一つのカタルシスも味わうことができる構成であった。
贅沢を言えば、島根という地域のなかでのクラブの位置付け、地域の関係などが分かる場面が挿入されていると、より「見知らぬ」チームに思い入れを持つことができたと思う。

■30 分の素晴らしいドラマを見せてもらった。そんな気持ちに今満たされている。「有名スポーツや著名人を取り上げるのがメディアの常道」だ。その流れにアンチテーゼを掲げ、クオリティーの高いドキュメンタリー番組に仕上げた制作陣を讃えたい。

連敗が続き、チームには暗いムードが充満する。北川キャプテンの元、コミュニケーションを重ねていくことの大切さがクローズアップされる。その様子も大仰でないところに好感を持った。外国人選手に依存しがちな日本人選手たちの姿は、広くスポーツ全般にも当てはまることかもしれない。そこに焦点を当てたところも良かった。

オープニングの導入から本編へ流れるテンポ、リズムが素晴らしかった。間延びさせず、あれもこれもと欲張らず、けれどしっかりとメッセージ性のある番組に仕上がっていた。

長尺なバージョンも見たいところだ。

GAORA では、これらの貴重なご意見を、これからもより良い番組をお届けしていくために大いに活用させていただきます。

［審議委員］

種子田穣委員長、影山貴彦副委員長、黒田勇委員、藤井純一委員、沢松奈生子委員、
森本志磨子委員、山本泰博委員 （以上 7 名）

以上